【ノート】

医学部医学科におけるAO入試および地域枠入試の導入とその結果

坂本尚志（旭川医科大学）

大学入試センター試験（以下センター試験）を学力担保として用いたAO入試と地域枠入試を組み合わせた入試を，医学部医学科に導入した。センター試験の難易度の変化が合格者数に与える影響について報告し，センター試験の学力担保としての有用性について，考察を加えた。

1 導入の背景

1.1 .地域枠導入

2006年8月「地域医療に関する関係省庁連絡会議（総務・財務・文部科学・厚生労働省）」が開かれ，「医師不足県における暫定的定員調整」が容認され，併せて「地域枠拡充」が謳われた。更に，翌2007年8月再び開かれた「地域医療に関する関係省庁連絡会議（総務・財務・文部科学・厚生労働省）」において，「医師不足地域や診療科で勤務する医師の養成の推進」が急務とされ，医学部における地域枠の拡充を図ること等を盛り込んだ「緊急医師確保対策」が出された。全ての都道府県で2009年から9年間最大5名（北海道は15名）として認められ，地域枠の設定・拡充も合わせて容認された。更に，2008年「経済財政改革の基本方針2008」による特例措置が出され，全ての医学部で養成定員の増加が認められた。

旭川医科大学（以下本学）は緊急医師確保対策としての7名に加えて特例措置の5名併せて12名の増員となった。既に20年度地域枠推薦入試（旭川を除く道北・道東の高校卒業者対象）および第2年次後期学士編入学地域枠（道内高校出身者または道内大学卒業者対象）として合計15名の地域枠の設置が認められていたが，「地域枠の拡充」という答申の方向に沿って，AO入試北海道地域枠（35名（22年度より40名），道内高校卒業者対象）を新設し，その定員を「推薦・AO入試の定員併せて入学定員の50%以下」という限度近くまで拡充し，大幅な(112名中55名)地域枠導入となった(表1)。

表1　入学者定員推移

	一般入試		特別入試			編入		合計
				地域枠				
年度	前期	後期	AO入試	AO入試	推薦	一般枠	地域枠	
19	30	40	20			5	5	100
20	20	40	20		10	5	5	100
21	40	17		35	10	5	5	112
22	40	22		40	10	5	5	122
23	40	22		40	10	5	5	122

1.2 学力担保としてのセンター試験利用

本学では特別入試における学力担保を，高等学校の調査書の評定平均値に一定の水準（4.3以上）を受験資格として設定する形式で行っていた。

AO入試として地域枠を導入するにあたって，定員が大幅に増加したことから，受験生数増加のために，評定平均値の水準を4.0に引き下げる代わりに，更なる学力担保としてセンター試験の受験および一定の得点率を求めるこ

ととした。

平成12年の大学審議会答申「大学入試の改善について」では,「大学入試センター試験の成績の資格試験的な取扱いの推進」が提言され,具体的な例として,大学入試センター試験で必要とする成績水準を明示した上で,大学入試センター試験の成績がその水準に達している者は個別試験に進ませ,大学入試センター試験の成績は合算せずに個別試験の成績のみで合否を判定するという方式等が例示されている。

本学の,地域枠推薦入試では,センター試験を資格試験(本学配点の75%以上)として扱い,個別試験の成績のみで合否を判定するという方式を導入した。

また,平成21年度から導入したAO入試においては,同時に後期日程の定員を減らし,前期日程の定員を増加するという変更を行ったため,学力担保を求めるとともに,より学力の高い受験生を取りたいという意向から,センター試験を資格試験として扱うとともに,推薦入試に比べさらに高い水準(本学配点の80%程度)を要求し,かつ個別試験(面接・小論文)と合算する方式を導入した。また,道東・道北の高校出身者対象の推薦入試とAO入試を併願した場合は,より高いセンター試験水準を超えていることから,AO入試による合格を優先するものとした。

センター試験の各科目に対する傾斜配点は,本学の求める学生像を反映するものであり,一般入試においては個別試験の科目配点も考慮して,数学,理科,英語に重点を置いた傾斜配点がされている。特別入試,特にAO入試においては,求める学生像,すなわち数学,理科,英語により高い学力を有する学生を反映する配点とした。(表2)

2 入試実施状況

2.1 志願状況および入学者状況

AO入試志願者は初年度の21年度は60名と定員の1.7倍であった。22年度は85名(2.1倍),23年度は119名(3.0倍)と年度と共に増加した。

推薦入試志願者は初年度の20年度は22名(2.2倍),21年度は27名(2.7倍),22年度は29名(2.9倍),23年度は31名(3.1倍)と,増加率は低いが,AO同様年度と共に増加した。

表2 センター試験配点

	国語	社会	数学	理科	英語	合計
前期	100	50	100	200	100	550
後期	100	50	150	100	150	550
AO	200	100	300	300	300	1200
推薦	200	100	200	200	200	900

入学者は,AO入試では,21年度センター試験80%という資格を超えて合格したものは15名であり,35名の定員を満たさなかった。そのため余剰の定員20名は,前期日程に振り替えることとなった(表3)。

表3 定員振り替えによる入学者推移

年度	前期	AO入試	推薦入試
21	60(40)	15(35)	10(10)
22	68(40)	17(40)	5(10)
23	40(40)	40(40)	10(10)

(括弧内は振り替え前の定員)

22年度も,合格したものは17名であり,40名の定員を満たさず,余剰の定員23名は,前期日程に振り替えることとなった。

推薦入試は,20,21年度はセンター試験75%という資格を超えて合格したものは10名以上あり,定員割れはなかったが,22年度は資格を超えて合格したものは5名であり,5名

を前期日程に振り替えた。

その結果,前期日程の定員は21年度60名,22年度68名と大幅に増加した（表3)。

表4　センター試験結果推移（傾斜配点に対する得点率(%))

年度		20	21	22	23
AO	最高		90.9	88.3	88.4
	最低		79.7	79.7	75.0
	平均		83.6	83.5	80.9
推薦	最高	92.4	82.1	79.4	85.4
	最低	75.4	75.3	75.9	75.7
	平均	81.0	78.6	77.7	81.2
前期	最高	92.1	88.9	87.0	90.0
	最低	83.6	73.4	73.8	83.9
	平均	87.7	81.6	80.7	78.5
後期	最高	93.3	89.2	88.0	89.7
	最低	81.9	75.3	73.7	79.2
	平均	88.3	83.8	81.7	84.3

振り替えによる大幅な定員増加により,従来と比べ,センター試験得点率の低い学生が一般入試で入学することとなったため，AO入試・推薦入試の定員を満たし,前期日程への振り替えが少なくなるように，23年度より，AO入試のセンター試験下限点を推薦入試と同じ75%に引き下げた。

また,学力担保のレベルを同等にしたことから,併願した場合AO入試による合格を優先していたが,学校推薦である推薦入試による合格を優先することと改めた。

その結果，23年度はAO入試，推薦入試ともに定員を満たした（表3)。

2.2　センター試験成績

AO入試では募集要項にセンター下限点は80%程度としていたが，入試委員会において“程度”とは得点率の小数点以下第一位を四捨五入して80%と定義したので，21年度，22年度ともに最低は79.7%となった（表4)。

しかしながら,最高点は一般入試と比べても遜色なく，平均点は21，22年度とも，振り替えにより定員増となった前期日程より有意に高かった。また，22年度は振り替えのなかった後期日程よりも高い値となった。

センター試験の下限を引き下げた23年度はAOの下限点は75%となり,平均も80.9%と低下したが,一般入試の平均も低い値となっており，前期日程よりも高い値を示していた。

推薦入試では，下限点は21，22，23年度とも変わっていないので，最低点は75%か，わずかに上回る値であり,平均点も振り替えのあった21，22年の前期日程よりも低値となっていた。23年度は，AO入試の下限点引き下げにより，推薦入試の合格を優先するために，平均値はやや高くなったが，20年度の値とさほど違いはなかった。

2.3　道内出身者割合

112名中55名という大幅な地域枠の導入により,一般入試も含めた入学者のうち北海道出身者の占める割合（道内率）は，AO入試，推薦入試が定員割れを起こした21年度,22年度でも70%を超え,定員を満たした23年度には80%を超え，過去最高の値となった（表5)

表5　道内出身者率(%)

年度	19	20	21	22	23
道内率	34.0	51.0	71.4	70.5	81.1

3 成績追跡

3.1　入試区分別成績

21年度に設定したAO入試におけるセンター試験下限得点率 80%および推薦入試における 75%は，前年度の一般入試前期日程の最低得点率83.6%よりも，低い値であった（表4)ことから，入学後の修学に問題がないか，入学

後の学生の成績を追跡した。

表6　入試区分別GPAの平均と標準偏差(S.D.)

		前期	後期	推薦	AO
21年度	平均	2.207	2.094	2.211	2.314
	S.D.	0.396	0.364	0.284	0.381
22年度	平均	2.197	2.209	2.310	2.338
	S.D.	0.367	0.365	0.269	0.323
23年度	平均	2.247	2.233	2.338	2.177
	S.D.	0.385	0.472	0.377	0.380

21，22年度ともに，入試区分による成績に有意の差は認められなかった。(表6)

3.2　センター試験成績

21年度入学生は，1学年終了時，10名の留年生（AO入試1名，一般入試前期8名，後期1名）があり，センター試験得点率はAO入試79.7%，前期81.8%（平均），後期84.8%であった。

22年度は，1学年終了時，14名の留年生（推薦入試1名，一般入試前期9名，後期4名）があり，センター試験得点率は推薦入試77.8%，前期79.6%（平均），後期（82.7%）であった。

21，22年度いずれの年度においても，全入学者において，センター試験とGPAの間に有意の相関は認められず，入試区分別においても，有意の相関は認められなかった。成績不良（GPA低値）のものは，センター試験得点率80%前後の者に多く，75%近くや90%近いものには少なかった（図1，2)。

4　考察

センター試験を資格試験として，定員割れを起こしているということは，受入方針に合致しているかを評価するために，大学独自の工夫・開発を行ってきた面接・小論文と言った二次試験が全く有効に機能しないという結果を招いたことになる。最低限の学力担保のために導入したセンター試験のために，特別入試の本来の

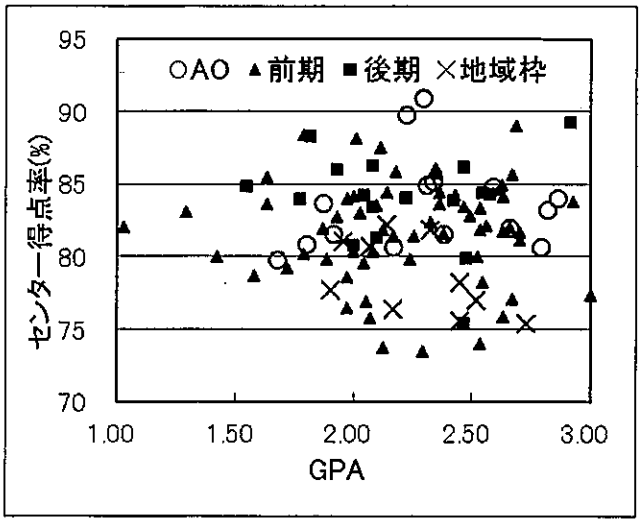

図1 GPAとセンター得点率（平成21年度）

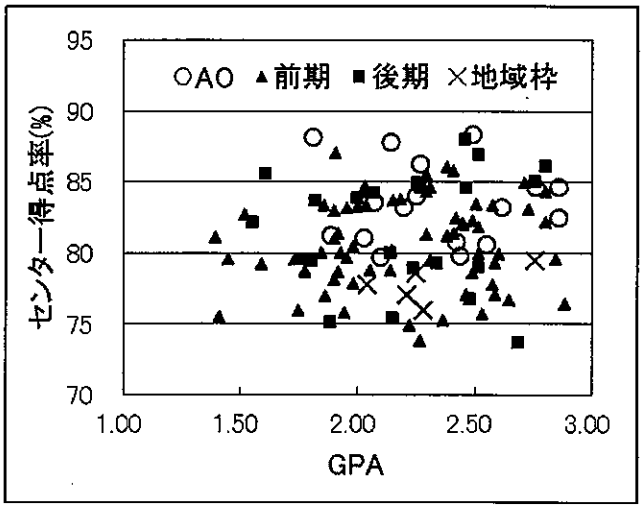

図2 GPAとセンター得点率（平成22年度）

意図が蔑ろになってしまうという本末転倒の結果を招いたともいえよう。

18歳人口の減少とともに，入学者確保として学力試験を伴わないAO入試が利用されているという風評があり，従来受験学力の成績高位のものしか入学出来なかった医学科において，AO入試を導入することには，たとえ審議会答申に沿っているとはいえ，当初学内外から多くの戸惑いがあった。しかしながら，入学後の追跡調査により，一般入試により入学したセンター試験高得点の学生よりも，臨床実習における態度・技術評価において有意に高い評価を

受けるという追跡調査結果が出る(坂本尚志他2007, 2009) につれ, AO 入試に対する評価は変わってきた。

しかしながら, 地域枠導入に伴う, AO入試の大幅な定員増加に際して, 学力担保としてのセンター試験の導入を行った。

従来、一般入試における最低得点率は, 80%を超えていた (表4) ので, 推薦入試で用いた75%よりも高い 80%というレベルはさほど高い水準ではないという予測であった。しかしながら, 初年度の21年度の結果は60人中15名しか80%を達成できていなかった。

この原因の一つとしては, 初年度であり, どのような判定基準となるか不安を持った受験生が多く, 受験をしり込みした可能性が推測される。事前に道内各地においてAO入試の説明会を複数回開催したが, 受験生数が60名と募集人員の1.5倍しか集まらなかったことは, 評定平均値やセンター試験といった受験資格のハードルよりも, 新しい受験制度への不安が, 受験生に二の足を踏ませた可能性は否めないであろう。

翌22年度には85名と2倍以上の倍率となった。しかしながら, 前年度以上に 80%というセンター試験の基準を満たすものが少なく, 地域枠推薦と併せて28名という大量の前期定員の増加となってしまった。

初年度は周知不足の可能性もあるが, 2年目になり, 受験生も増えており, 定員割れをきたす原因, すなわちセンター80%以上の学生が十分な数そろわなかったのは, 周知不足に起因するとばかりは言えないと思われた。

本学を志す受験生が少ない可能性もあるが, 一般入試は例年10倍近い倍率であり, 決して志望するものが少ないとは思われない。

21年度のセンター試験の結果 (表4) を見ると, 定員振り替えのなかった後期日程においても, センター試験の平均が 83.8%と前年度より5%近く低下し, 最低点も80%を下回っていた。資格試験としてのセンター試験の難易度が高かった可能性が推測された。

大学入試センターから公表されている平均点を見ると, (大学入試センター, 2013) 各科目の平均得点率は概ね 60%程度であり, その増減は, プラスマイナス10点程度に収まっているが, 科目によっては20~30点以上増減することが多々ある (図3)。

平成21年度を見ると, 前年度より増加した科目は化学 1 科目のみであり, 他の科目は全て減少している。また, 平成22年度は増加した科目は3科目に対して減少した科目は4科目あり, うち2科目は20点以上の減少であった。平均点は 60%程度であり, 本学の求める80%水準の難易度をそのまま反映しているとは言えないかもしれないが, 21, 22年度はセンター試験の難易度は高かったといえよう。

大学入試センターより合格者データと共に送付されたデータの解析から, 80%以上の高得点の受験生数の増減を見ると, 科目により受験者数が異なるが, 21年度は高得点者が増加した科目は2科目のみ, 残りの5科目はいずれも減少しており, また22年度は増加した科目は3科目, 減少した科目は4科目であった (図4)。

本学では科目ごとに傾斜配分を定めている (表2) ので, 高得点者の増減した科目の多少だけで, 合格者レベルに達した受験者数の増減を説明できないが, 資格試験として一定の水準を求めるには, 大きすぎる変化であろう。

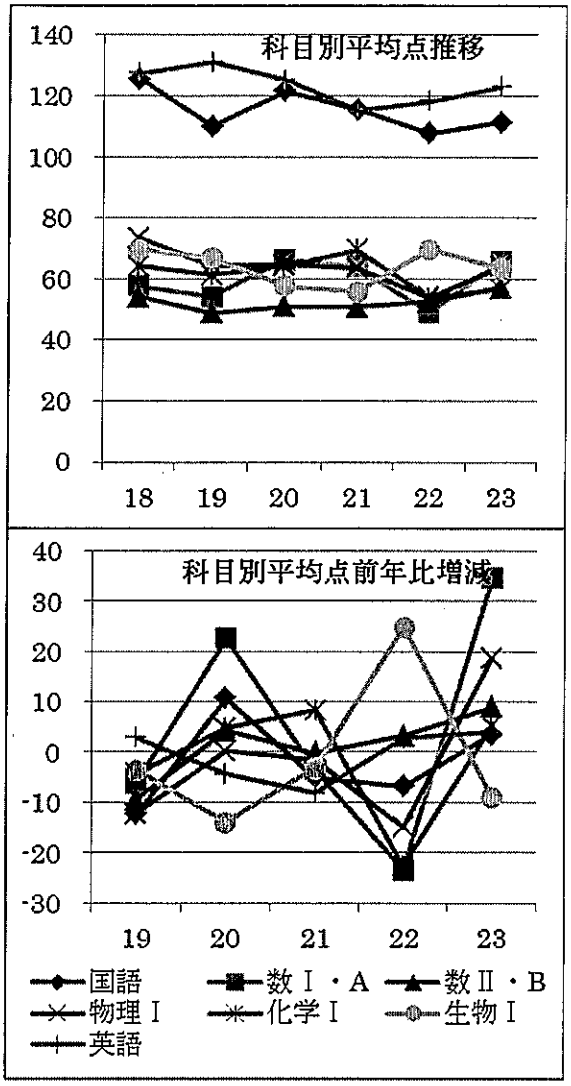

図 3　センター試験平均点推移（H18-23 年度）

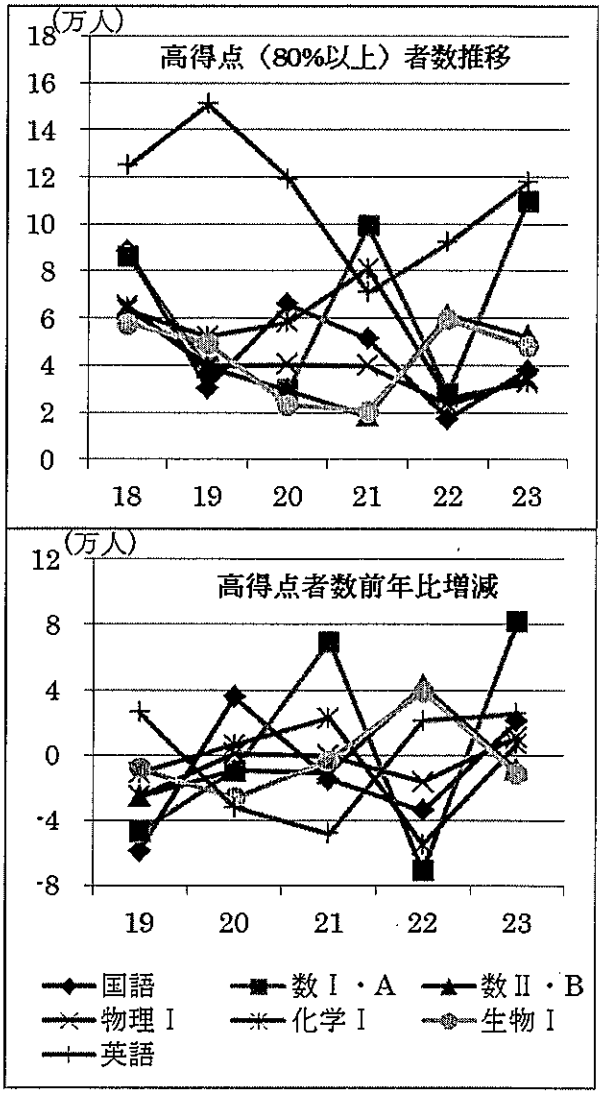

図 4 センター試験高得点者数推移（H18-23 年度）

面接・小論文等を工夫して，受入方針に沿った選抜方法を開発しても，学力担保としてのセンター試験のレベルがある程度一定となっていないと，求める人材を確保できなかった事例として，今後，センター試験を資格試験として導入する他校の参考となれば幸いである。

参考文献

坂本尚志，藤尾　均，谷本光穂，内藤　永，渡部　剛，木村昭治，塩野　寛，2007，「AO 入試とその他の入試区分学生の医学科臨床実習における評価の比較」　大学入試研究ジャーナル No, 18, P101-106.

坂本尚志，中村正雄，内藤 永，渡部　剛，清水惠子，長谷部直幸，山内一也（2009）.「医学部共用試験成績(CBT・OSCE)と入学者選抜方法の違い」　全国大学入学者選抜研究連絡協議会予稿集

大学入試センター　受験者数・平均点の推移（本試験）平成18～23年度センター試験　大学入試センター　2013年 <http://www.dnc.ac.jp/modules/center_exam/content0097.html>（2013年）